

Title	其角と蕉門俳諧の研究
Author(s)	根来, 尚子
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/58533
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

【15】

氏 名	ね ころ なが こ 子
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 4 2 8 5 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 23 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	其角と蕉門俳諧の研究
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 飯 倉 洋 一 (副査) 教 授 金 水 敏 講 師 合 山 林 太 郎

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、芭蕉の高弟である其角について、主として其角が携わった撰集全体の読解を、其角の編集意図を考慮した上で行い、そこから芭蕉や蕉門俳人の作風を照射するものである。あわせて芭蕉中心に記述されてきた従来の俳諧史を、其角の視点から相対化するという問題意識をも持つ研究であり、400字詰め原稿用紙換算で約290枚である。

第一章「其角の登場と延宝末・天和期の俳諧」では、其角の俳壇登場の時期に焦点をあて、蕉門・蕉風形成との関わりを視野に、漢詩文調俳諧をめぐって考察している。第一節「其角のこころみ—『田舎之句合』から『俳諧次韻』へ—」では、芭蕉の初期作品として従来扱われてきた『田舎之句合』『俳諧次韻』を取り上げ、それらの書の編集刊行に其角が中心的役割を果たしたことを指摘し、其角の句を含めた全体的な解釈を行い、蕉風形成期の芭蕉がむしろ其角に影響を受けている面のあることを提示した。付節「青木春澄の出自について」では、芭蕉や其角が『俳諧次韻』の興行において交流を持った京の俳人青木春澄の出自について、『文翰雜編』の記事を主材料に、新事実を指摘した。特に同時代に活躍した漢詩人青木元澄と兄弟であることを明らかにし、延宝末から天和期にかけての漢詩文調俳諧の流行の背景を考える上で重要であることを指摘した。

第二章「旅と撰集」では、貞享から元禄初年にかけての蕉門俳諧を、旅と撰集という観点から考察している。この時期は芭蕉が『野ざらし紀行』から『奥の細道』にかけて旅を続け、蕉門俳書が続々と刊行された時期であるが、その中で其角の刊行した紀行・撰集を取り上げ、芭蕉および蕉門俳人の作品を相対的に評価する視座を得ようとしている。第一節の『新山家』の方法は、其角が貞享二年に刊行した『新山家』が、中世紀行文の型を取り入れつつ、大願和尚の追善というテーマに沿って複数の典拠を繋ぐという方法をとっていることを明らかにした。また芭蕉『奥の細道』に見える「古人に擬する」という方法が、『新山家』に既に見られることを指摘した。第二節『花摘』のかたちでは、母の追善にちなむ日記という形をとる其角の『花摘』が、個人的な記録という形式を活かして自由な編集を可能としたこと、芭蕉の『奥の細道』の旅とその後の動向や幻住庵での生活の様子を描くことで、其角が江戸蕉門に師芭蕉の動向を伝えたと共に、芭蕉にも江戸のことを報告する意図があり、芭蕉も「几右日記」で、日記のかたちに応えようとしたことを指摘した。

第三章『雑談集』と蕉門俳人は、元禄五年刊行の其角の俳論書『雑談集』を、其角の視点から蕉門および蕉風を捉えた書として読む試みである。第一節「其角と荷兮」では、貞門古風の作風ゆえ芭蕉を離反した門人として位置づけられてきた荷兮の評価を其角と関わらせて再検討し、荷兮が新風・古風にとらわれず、作者の「心（誠）」と「時宜」を重視していると評価し、蕉風離反の意図はないことを明らかにした。第二節の「其角と尚白」では、やはり蕉風離反とされる尚白編『忘梅』を、其角は支援していること、一方で芭蕉の新風における工夫を尚白が理解できないことも其角が指摘していることを明らかにした。

以上を踏まえて終章「芭蕉の終焉と其角」では、芭蕉の追善集『枯尾華』の成功は、其角の手腕が大きく、芭蕉離反とされた俳人たちも連なることができたのは、調整役としての役割を其角が果たしたからだと指摘しつつ、其角の「芭蕉翁終焉記」が『宗祇終焉記』に倣ったものであることを具体的に検証した。

近世俳諧史や近世俳諧の作品論はこれまで多くのものが芭蕉とその作品を中心に叙述されてきた。蕉門の俳人たちは芭蕉の影響を全面的に受けているとされ、その逆はほぼ想定されていなかった。しかし本論文では、其角を検討の軸として、その定まった見方を相対化する視点を打ち出している。其角は芭蕉の門人でありながらも、蕉風形成期から芭蕉の死に至るまで、大きな存在感を示し、むしろ芭蕉に影響を与えた面もあることを実証し、従来の芭蕉中心の俳諧史とは異なる見取り図を示したことは高く評価してよい。

とくに第一章第一節では、蕉風確立にいたる混迷期とされる延宝末から天和にかけての、漢詩文調的とされる『田舎之句合』『俳諧次韻』を取りあげて、従来のようにこれを芭蕉の作品として読むのではなく、其角の作品を含めた全体として読解しなおすことを提唱し、其角の機知に富む創作・編集手法をあぶり出している。また芭蕉が其角を評価していたことを丁寧に論証し、芭蕉の判詞の作成に其角が関わっている可能性をも指摘したことは重要である。

また第二章第一節では、従来ほとんど考察されていなかった其角の紀行『新山家』を取りあげ、多くの典拠を指摘しつつ、それに基づいて古人を真似るという其角の趣向を析出し、それが『奥の細道』の「古人を擬する」という方法の先蹤であることに言及したことは重要である。これらの指摘は、芭蕉中心の俳諧史の枠組みに再考を迫るもので、俳諧史研究の上でも有意義である。

一方で、第三章における其角俳論書『雑談集』の考察においては、其角の俳論の俳諧史上における意義を述べるというよりも、俳壇政治的調整能力に長じていたことの方が強調されている印象があり、物足りなさは免れない。また論述の中で疑問形や推量形が目立ち、文体に重厚さを欠くところがある。

そのような問題点はあるものの、その提起する問題の大きさや、内容の充実度はそれを十分に補っていると言える。よって本論文を博士（文学）にふさわしいものと認定する。